

令和2年度 第2回 荒尾市総合教育会議 会議録

1. 日 時 令和3年2月9日(火) 午前10時～正午

2. 場 所 荒尾市役所 市長公室

3. 出席者

荒尾市長	浅田 敏彦
荒尾市教育長	浦部 眞
荒尾市教育委員	境 民子
荒尾市教育委員	西尾 直子
荒尾市教育委員	渡邊 義専
荒尾市教育委員	旭田 國浩
(オブザーバー) 副市長	田上 稔
(事務局職員) 総務部長	石川 陽一
文化企画課長	中山 創
文化企画課世界遺産・文化交流室長	吉田 政博
総合政策課長	田川 秀樹
総合政策課政策推進室長	奥村 猛
総合政策課政策推進室担当	丸本 真由子
教育審議員兼学校教育課長	永杉 尚久
教育次長兼教育振興課長	橋本 張幸
学校教育課指導主事	大塚 真史
学校教育課指導主事	成瀬 典子
学校教育課指導主事	溜渕 知昭
教育振興課長補佐兼学務係長	畑山 鉄也
教育振興課教育政策係長	吉村 麗月
教育振興課学校給食センター整備推進室長	岡村 哲明
生涯学習課長	宮脇 浩司
生涯学習課社会教育係長	馬場 理恵子
生涯学習課スポーツ推進係長	前田 恵子

4. 傍聴者 無し

5. 議事

(1) 令和3年度の新規(拡充)事業について

(2) 新図書館の整備について

6. 報告事項

- (1) 野原八幡宮風流の国指定について
- (2) 個別施設における今後の方向性について
- (3) 新学校給食センターの進捗状況について
- (4) 次期教育振興基本計画の策定スケジュールについて

7. 議事経過の概要

以下のとおり

○議事経過の概要

1. 開会

田川総合政策課長が、開会の宣言、配付資料の確認を行った。

2. 市長あいさつ

浅田市長が、あいさつを行った。

- ・新型コロナウイルスが日本で確認されて約1年になる。学校の教育現場においては、日頃から子どもたちの感染防止に努めていただき、感謝申し上げます。日本では、感染力の強い変異種が確認されており、まだまだ予断を許さない状況が続いている。本市においても、ワクチン接種に向けて準備を進めており、少しでも早く終息できるように努めていきたい。
- ・新型コロナウイルスの影響により、今年度の教育フォーラムは開催できず、教育委員会や学校のホームページ上での報告となった。オンラインの学校づくりに向けた様々な取組みが行われ、写真等を通じて、子どもたちの生き生きとした表情を見ることができ安心した。子どもたちが安心して学習できる環境を整備することが、行政としての喫緊の課題だと認識している。
- ・暮らしたいまち日本一を目指すことを公約に掲げている。総合的な暮らしやすさの中でも、「教育」という要素が極めて重要だと考えている。幼稚園・保育園から高校まで、人を育てるという観点で、切れ目のないつながる教育を目指していきたい。
- ・本市の教育に関する取組を紹介したい。1つ目は、本市では数年前から準備を進めてきたICT教育の整備。国の支援もあり、小中学生に1人1台のタブレットがまもなく配付される。あくまでもタブレットはツールであり、それを使って子どもたちをどういうふうに育てていくのかを考えていかなければならない。2つ目は、長洲町と共同で進めている新しい学校給食センターの建設である。令和4年9月、安心して食べられるおいしい給食を提供できるように引き続き進めていきたい。3つ目は、市立図書館をあらおシティモールに移転整備することが決定した。日本を代表する紀伊国屋書店のご協力を得て、居心地の良い滞在型で、デジタ

ルライブラリーと言えるような未来型の新しい図書館、そして「本のまち荒尾」として学校等と連携した図書館を作っていきたい。

3. 議事

(1) 令和3年度の新規(拡充)事業について

資料1に基づき、令和3年度の新規(拡充)事業について、橋本教育振興課長、永杉学校教育課長、宮脇生涯学習課長、中山文化企画課長が説明を行った。

<主な意見等>

西尾委員	新型コロナウイルス感染症が拡大する中、子どもたちの学びの保証として様々な手立てをしていただいたが、市からの奨学金等があれば教えていただきたい。 →本市では、三光株式会社のご支援による三光育英会を創設しており、高校生もしくは高専生を対象に、年間4人、1人あたり毎月約9,900円の奨学資金を支給している。(橋本課長)
西尾委員	貧困の問題に加え、十分に学ぶことができない環境の子どもたちもいるため、市から応援していただけると有難い。
浅田市長	市としても子どもたちのために出来ることを十分に検討していきたい。
渡邊委員	万田坑の専用鉄道敷跡は散歩道となっているが、敷いてあるゴムマットが景観として良いとは言えないと思う。地域美化のため、花等が植えられないかなどの検討を行っているところである。今後も市に相談しながら、協力できたらと考えている。 →景観の保護に努めていきたいところであるが、世界遺産の敷地内であるため手を加えるのはなかなか難しい状況である。周辺道路等であれば花植え等も可能なので、そちらでお願いしたいと考えている。(中山課長)
浅田市長	三池港とつながっている鉄道敷きは距離もあるため、鉄道敷きを歩いて、スケール感や仕組みなどを体感してもらうのと併せて、周辺環境整備を行い、ウォーキングロードとしての活用の可能性も探っていきたいと考えている。
旭田委員	今年予定していた青少年の国際交流事業は、来年実施する予定か。 →今年度から予算化し、市内の中学生11名をシンガポールに派遣する予定だったが、新型コロナウイルスの影響でシ

ンガポールに入国することさえ難しい状況となっているため、今年度は中止となった。来年度は、ICTを活用してシンガポールの中学校との交流を考えており、具体的な取り組み内容を検討しているところである。(中山課長)

浅田市長

ぜひ本市の子どもたちが、シンガポールの子どもたちと交流して、世界に羽ばたく子どもたちに成長していただきたいと考えている。新型コロナウイルスの影響により、今すぐシンガポールに派遣することはできないけれど、いまできる方法で交流を続けながら、終息後には直接会って交流ができるようにしていきたい。なお、予算については子ども未来基金を活用させていただき予定であり、基金にはこれまで約4千万円の寄附金をいただいている。荒尾の未来を担う子どもたちのため、大切にに使わせていただきたい。

浦部教育長

令和3年度の具体的な取り組みとしては、ICT教育の充実、英語の日常化を中心に取り組んでいく必要があると考えている。

境委員

世界遺産まちづくり人材育成事業において、令和3年度は市内全小中学校に万田坑子ども用パンフレットを配付すると記載されているが、どのように配付されるのか。ただ配るだけでは見ない可能性もある。また、全小中学生だと理解が難しい学年もあるため、活用や配付の仕方を検討していただきたい。

→全学年にまとめて配付するだけで考えていたが、ご意見を参考にさせていただき、配付方法は検討したい。(中山課長)

浅田市長

小中学校それぞれの学年で万田坑や宮崎兄弟生家等について、現地を訪問したり学んだりするのか。

→平成28年度から全小中学校の総合的な学習の時間として指導計画の中に位置づけ、万田坑、荒尾干潟、宮崎兄弟家の3カ所を、小学3年生から6年生の間に1度は現地を訪問し、「荒尾の宝もん」という冊子を作り学習している。(大塚指導主事)

(2) 新図書館の整備について

資料2に基づき、宮脇生涯学習課長が説明を行った。

<主な意見等>

浅田市長

図書館が老朽化しているのは十分に認識していたが、単独で新設するには費用が大きくなり、他の老朽化している施設

もある中で今すぐ図書館を建て替えることは難しいと思っていた。それが今回、あらおシティモールから、テナントの入れ替えや契約期間の満了等によりスペースが空くため、併せてリニューアルを考えており、市での活用はいかがかの打診があった。ポイントとしては、図書館を商業施設に入れている例はあるが、果たしてそれが良いのか。また、誰がそこを運営していくかが重要で、良いパートナーが見つからなければ図書館の質を向上させることが難しい。幸い、紀伊国屋書店を紹介いただき、全国の大学図書館や公立図書館を運営されている実績があり、海外の先進的な図書館を何カ所も訪問され、日本の公立図書館をもっと良くしたいという強い使命感と熱意を持っておられ、協議を重ねていく中で、紀伊国屋書店であれば市民の皆さんに喜んでいただけるような図書館ができると感じ、本市の図書館の運営をお任せすることにした。

紀伊国屋書店から、基本的には紙の書籍をベースとするが、海外では電子書籍が普及しており、図書館に行くことができない人が自分の都合の良い時間に本を閲覧することができる電子書籍は、これからの日本の図書館にも必要だという思いを聴いて、非常に共感した。視力が十分でない方は図書館に行っても本は読めないが、プロの方が本の内容を録音したオーディオブックがあると、音として聴いていただくことができる。障がいがある方には、そのようなサービスを提供することができる。

デジタルコンテンツを活用しながら、本のまちを目指していくことは、本市の特徴の1つとなる。ぜひ、「本のまち荒尾」として成功できるようにしたい。

委員の皆様には、このような図書館にして欲しいという中身についてご意見いただきたい。

渡邊委員

私の子どもは荒尾市の図書館ではなく大牟田市の図書館に毎週通っている。新しい本が少なく、蔵書数も少ないため、読みたい本がないというのが大きな理由で、大牟田市の建物が綺麗という理由もある。いま説明いただいたように整備されれば、利用者も増えていくことが見込まれる。朗読会の案内や本の紹介等、図書館からの発信手段として、FM たんとを活用してはいかがか。

移動図書館の「よむよむくん」はあまり活用されていないのではないか。平日のみの巡回であれば利用者は少ない。新図書館になっても移動図書館を継続するというのであれば、土日にも巡回させてはいかがか。

→FM たんとについては、図書館のイベントのPR等を行っている状況であるが、新図書館へ移転後もPRを強化していきたい。

また、移動図書館については、車が老朽化しており、修

理をしながら巡回している状況である。学校へ行くと子どもたちは借りてくれるが、他の施設等に行っても利用者が非常に少ないため、状況を見ながら巡回場所を変更するなどの検討を進めているところである。移転後に移動図書館をどうするかについては今後検討していく。(宮脇課長)

境委員 子どもたちが休日は図書館に行こうという気持ちを持つようになってほしい。そのためには、子どもたちが安全に行けるような移動手段の確保ができないかと考える。

旭田委員 図書館の利用時間は、あらかしモールの開店時間と同じになるのか。
→現段階では明確に決めていないが、現在の利用時間よりも延長させることを検討している。(宮脇課長)

西尾委員 移動図書館は保育園へも巡回しているか。保育園にも行くことで、そこでも新しい図書館を宣伝することができるのではないか。
→保育園にも声掛けを行い、現在は桜山保育園に行っている。(宮脇課長)

4. 報告事項

(1) 野原八幡宮風流の国指定について

資料3に基づき、中山文化企画課長が説明を行った。

<質問等>

境委員 稚児の成り手の問題は特にないのか。
→成り手については地元で苦慮しているところである。小学1年生から稚児になってもらったら6年生まで続けてもらうが、その後は師匠となり、新たに1年生で稚児となった子どもを指導していくという繰り返しである。子どもの人数が減ってきていることや地域の方の理解を得ることが、地元では課題となっている。今回、風流が国指定となることで、協力していただける方が増えることを期待している。(中山課長)

→国指定になることにより、価値が高まり、今後の人材育成に関する補助金等の国の支援を受けられるようになる。(田川課長)

旭田委員 国指定になると補助金等がいただけるのか。
→特別交付税として66万円程度いただける予定である。他にも、用具等の修理に使うことができる国庫補助金もあ

る。(中山課長)

旭田委員

年によっては1年生がいない年もあり、その場合は2年生から選ぶこともある。なかなか成り手がなく、苦慮している状況である。

境委員

伝統行事を、続けていく、残していく、育てていくことが難しい世の中である。段々と人々の心を繋いできた思いが薄れてきており、寂しく感じる。菰屋・野原・川登の地区に限定するのではなく、他の地域からも応援に来てもらい、市全体で伝統的なものを守っていく気持ちを広めていただきたい。

(2) 個別施設における今後の方向性について

資料4に基づき、宮脇生涯学習課長が説明を行った。特に質問等は出なかった。

(3) 新学校給食センターの進捗状況について

資料5に基づき、橋本教育振興課長が説明を行った。特に質問等は出なかった。

(4) 次期教育振興基本計画の策定スケジュールについて

資料6に基づき、橋本教育振興課長が説明を行った。

<質問等>

浅田市長

策定委員会のメンバーはどのように考えているか。
→学識者、学校の先生、社会教育・体育・文化等、教育関係者を予定している。(橋本課長)

浅田市長

コンサルタントには、様々な基礎データの収集・分析までは任せられると思うが、教育の中身については、教育長はじめ教育委員会が主体となり、コンサルタントとの役割を明確化して作成していただきたい。
また、現行計画において、重点施策に「学力の向上」が入っていなかった。そのあたりの考え方を教育委員会の中で十分に議論していただきたい。
更に、現行計画はいつまでに何をどうするという目標が不明確なため、進捗管理が事実上できないものとなっている。この点についても次期計画では、目標を数値化できるものは数値化し、数値化できないものについても、目標は掲げるべきであるため、策定委員会もしくは教育委員会において、基本

的な仕様を固めて、主体的に取り組んでいただきたい。

(5) 教育施策全般について

その他として、議事以外の教育施策全般について、意見交換を行った。

<主な意見等>

浅田市長	毎年行う小中学校の校長先生との意見交換の中で、様々な要望があるが、一番は少人数学級の実現に関することである。それだけ現場の先生方の負担が非常に大きいという話を聞いている。そのような中、国では全国的に少人数学級の導入が進められることとなったが、具体的な国としての進め方や県の動きについて教えていただきたい。
浦部教育長	国は少人数学級として35人以下の学級を実現するという方針を打ち出した。令和3年度より、小学2年生から段階的に5年間で35人学級をつくり、5年後には小学校の全学年で35人学級となる予定である。それに先駆け、既に県では小学1年生及び2年生は35人学級の方針を示しているため、熊本県教育委員会としては、来年度は現状の方針から変更しない予定である。また、県独自の考えではあるが、来年度より、中学校1年生に35人学級を導入する方針で進めているところである。小学校から中学校へ上がる時の生活習慣等の適応が難しい、いわゆる中1ギャップの解消を目的としている。本市においても、県と同様に進めていくことが望ましいところではあるが、それには財源、教職員の人数や配置、教室数の確保等が必要になってくるため、本市単独では難しいことから、近隣自治体や県などの状況を見ながら検討していきたいと考えている。
浅田市長	全国的に教職員の確保はできそうなのか。
浦部教育長	実際は難しいと思われる。教職員の確保においては、臨時採用の職員の確保さえ難しい状況である。
旭田委員	最近では、親の学びがもっと必要だと思う。先生と親と子どもで学習に対する態度等をきちんと学び、しっかりと子どもと向き合っていくことが大事である。
渡邊委員	家で勉強しない子どもは学校でも勉強しない。いかに親に対して、勉強というのが大事かということをおぼろげに分かってもらわなければならない。子どもの勉強に対する意欲を引き出すのは先生や親であり、親に対する教育は大事だと考える。
境委員	親だけでは限界もあり、市民全体で子育てをする環境づくり

が必要だと考える。子どもだけを育てるのではなく、大人も大人として育てなければいけない。大人になったら仕事をすること子どもたちにも見せ、大人は自分を振り返りながら子どもを育て、周りに伝えていくべきである。荒尾市では子育てに力を入れているということ、市民に意識してもらえようとする必要がある。荒尾市外の中学校に進学する子どもたちが増えていると耳にするが、それは荒尾市の教育が信用されていないからじゃないかと考える。それを誰かのせいにするのではなく、皆が自分のこととして受け止められるような風土づくりを急いでする必要があると考える。そのために、大人になっても本と親しもうとする図書館は、荒尾市の1つのシンボルになる。様々な機会を通じて、子どもを育てることは大事であり、自分自身もそのことによって育っていくということを忘れないようにしていきたい。コロナ禍の中で良いこともあった。子どもたちの「学校へ行きたい」と「友達に会いたい」という声である。他にも、子どもたちから、休みがない先生へ労いの手紙を渡してあげるなど、心を寄せてくれる子どもたちがいて、自分たちも頑張らなければと思った。

西尾委員

新型コロナウイルスの影響により学校が休校になった際に、先生方が子どもたちをしっかりと支え、落ち着いた学校生活を送れるように頑張っていたと強く感じた。学校生活が始まる小学1、2年生の時に、学びの基本を先生方に教えていただいていたからこそ、いまの学年が早く生活の落ち着きや聞き入れる態度等を取り戻せた。先生方が心を込めて子どもたちに接していただいたおかげであり、感謝した。本市独自の方針が出せるのならば、小学1、2年生についても丁寧な指導ができるよう少人数学級の検討をしていただきたい。

また、学習が二極化する際に、支援をたくさん必要とする子どもの家庭は、全てではないが、生活力が弱い家庭が多いと感じる。学校に入ったけれども家庭の事情で、学力等が順調に伸びない子どもを、入学前の健康診断等で早期発見し、少しでも早く改善できるような制度や施設があれば、子どもたちも希望を持てるようになるのではないかと思う。そのような支援が必要な子どもたちや家庭に対し、荒尾市は見捨てない市であることも、全面的に打ち出していけると良いと感じた。

5. その他

田川総合政策課長が、来年度の開催時期は次期教育振興基本計画の策定時期に併せ開催する旨説明した。

6. 閉会

田川総合政策課長が、閉会の宣言をした。